

19. ^{131}I 治療量の投与を受けて帰宅した患者の家族の被曝量の評価について

古賀 佑彦 竹内 昭 佐々木文雄
 安野 泰史 (名保大・放)
 折戸 武郎 越田 吉郎 (金大医短)
 伊藤 国彦 (伊藤病院)
 西沢 邦秀 (名大・RI セ)

RI の治療量を投与された患者の帰宅基準を考えたときの基礎的な資料として、その患者が帰宅した際に同居している家族の実際の被曝量を評価する必要がある。前回までに、 ^{131}I を投与された患者周囲の線量率、家庭内における接触度などを調査し報告してきた。

今回は、 3.9mCi の ^{131}I を外来で投与された女性患者の家族に了解を求め、夫および10歳の長女、7歳の長男に TDL 素子を取りつけ、1 週間の積算線量を測定し、これを前回までの報告からの推定値と比較した。

測定は MSO 素子を用い、前頸部、胸部など 6 点で行った。

夫は $1.8\sim 3.3\text{mR}$ 、長女は $0.9\sim 2.4\text{mR}$ 、長男は $2.4\sim 4.7\text{mR}$ の被曝が計測された。患者は、このような測定をしたために、かなり神経質になり、接触をできるだけ避けていたと考えられるが、以前の報告から状況を合わせて計算された推定値と比較すると、比較的良好一致をみた。

このような測定例を増やし、基礎データとする予定である。

20. 透析患者における $^{99\text{m}}\text{Tc-MDP}$ の肺野異常集積の 1 例

滝 淳一 (金大・核)
 安藤 明 泊 康男 (北陸中央病院)
 利波 紀久 久田 欣一 (金大・核)

長期透析患者に対して $^{99\text{m}}\text{Tc-MDP}$ による骨シンチグラフィにて両側肺野、両側腎臓、胃壁への異常集積を認めた症例を経験したので報告する。症例は41歳男性、昭和46年慢性糸球体腎炎と診断され昭和47年より血液透析を開始した。透析液は昭和57年5月まではレナゾール3号をそれ以後はキングリー液3号を使用している。また昭和55年より活性型ビタミン D_3 の $0.5\text{ }\mu\text{g/day}$ の投与を受けている。昭和58年5月の骨シンチグラフィ時

の透析前のアルカリフォスファターゼは 3.9 KAU 、 Ca は 4.8 mEq/l と正常、 P は 4.4 mg/dl とやや高値を PTH-C 2.2 ng/ml とやや高値を示した。 $^{99\text{m}}\text{Tc-MDP}$ 30 mCi 静注3時間後に撮像し、両側肺野のびまん性集積と両腎、胃壁への集積を認めた。胸部単純写真、CT スキャンとも明らかな石灰化の所見は認めなかった。腹部単純写真、CT スキャンともに腎の小石灰化を認めた。文献的に両側肺にびまん性の骨シンチグラフィ用剤の集積を認めたものとしては、原発性および二次性副甲状腺機能亢進症、胃癌、乳癌、多発性骨髄腫などの悪性腫瘍による高カルシウム血症、肺泡微石症、ビタミンD中毒症が報告されている。本症例は透析による二次性副甲状腺機能亢進症による肺、腎、胃への転移性石灰化による MDP の異常集積と考えられた。一般に骨シンチグラフィは転移性石灰化の検出に関して単純写真などと比較し高い感度をもつ有用な検査法と考えられた。

21. 肝 mesenchymal hamartoma の一例

杉原 政美 (富山市民病院・放)
 宮本 正俊 野崎外茂次 (同・小児外)
 高柳 尹立 (同・研究検査)

症例は3歳男子、生来健康なるも右上腹部腫瘍を主訴として来院。IVP 著変なく、total body opacification によりわずかな染りを見る。

腹部エコー施行し、肝由来の腫瘍を疑いつつ内部には小 cyst の多発をみた。血管腫や、hamartoma を疑い肝シンチグラム施行。腫瘍は $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -コロイドを正常部に比し濃度は低いものの摂取し、網内系細胞の存在を示し、FNH, hamartoma を考え頻度より後者が示唆された。約 1 kg の腫瘍が摘出され mesenchymal hamartoma であった。術後1年、経過良好である。

22. 胸腺腫の核医学診断について

大口 学 長束 秀一 立野 育郎
 (国立金沢病院・放)
 高山 輝彦 利波 紀久 久田 欣一
 (金大・核)

重症筋無力症3例を合併した7例の胸腺腫に ^{201}Tl スキャンあるいは ^{67}Ga スキャンを施行した。胸腺腫は全例手術によって確認されており、組織学的に悪性、良性的他リンパ球優位型か上皮細胞優位型かに分類した。